



【たかのようなん】
 小学1年生の時、テレビで見た熊川哲也の踊りに衝撃を受け、バレエを始める。木村公香アトリエ・ドゥ・バレエ、東京バレエ学校ほかに学ぶ。立教新座高等学校在学中の2008年、第4回バレエコンペティションin奈良でスカラシップを獲得し、翌09年、ワガノワ・バレエ学校に短期留学。10年、同校8年課程に編入し、ボリス・フレグワゼの薫陶を受ける。11年、卒業と同時に芸術監督ナチョ・ドゥアトの指名でミハイロフスキー・バレエに入団。古典作品、『インヴィジブル』、『くるみ割り人形』など、幅広い作品に出演している。
 写真提供・ミハイロフスキー劇場
 Photo by Vadim Vasenin

プ、11時からレッスン、午後はリハーサル、夕方にまたレッスン、18時前にピエロのメイクをしてもらい、19時から本番。昼夜2公演の日も多くて、休む暇がない、食べる暇がない、家で料理をする余裕がない。食事は劇場の食堂が頼りで、メニューは、だいたいボルシチ、サラダ、肉類、ロシア人が主食代わりに食べる、そばの実。気持ちをリセットしたい時は、日本のお笑い番組を見て一人で笑っていました。厳しかったけれど、この経験のおかげで、舞台上力んだり緊張したりしなくなりました。舞台上踊ることは、僕の日常なんです」

インタビューに先だって見学したレッスンで、彼はつねに先頭グループにいた。教師達の言葉から察するところ、意欲的かつ聡明な団員。アンドレイ・バタロフのレッスンでは、彼はさらに食欲になる。マリインスキー・バレエ団員にして、レオニード・サラファアノフのコーチ、デンマーク王立バレエ団に在籍した経歴を持つ稀代のテクニシャンに、彼は全幅の信頼を寄せている。

「バタロフ先生は、ロシアのレッスンではあまり意識しない足裏の使い方や細かな足の動きを丁寧に指導してくれます。模範演技が、団員以上に上手い！先生との出会いによって、ロシアのバレエとヨーロッパのバレエが融合した、男性ダンサーのひとつの理想型を、僕のなかで

確立できました」

ロシア・バレエ界の中枢にいる彼の、次なる目標は何だろうか。

「主役を踊れるダンサーになりたい、もっと様々な作品を踊りたいです。たとえば、バラシン作品で独特の音の取り方やオフバランスの動きに挑戦したい。ヌレエフ版古典で、これでもかとい

う位に出てくる超絶技巧にも挑戦したい。それからキリアン、フォーサイス、デイヴィッド・ドーン、ヨルマ・エロ作品……。挙げていったら、きりがありません」

さらに自分を磨ける場を彼は求めているのだ。世界を視野に入れた高野陽年の挑戦は続く。



『くるみ割り人形』第1幕、ピエロを好演。
 Photo by Stas Levshin